

子規開眼(一) :
橘曙覧遺稿『志濃夫廼舎歌集』をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学国語国文学研究室 公開日: 2017-10-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 正博 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171225-053

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	子規開眼(一)：橘曙覧遺稿『志濃夫廼舎歌集』をめぐって
Author	村田, 正博
Citation	文学史研究. 48 卷, p.56-66.
Issue Date	2008-03
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

子規開眼(一)

橘曙覧遺稿『志濃夫廼舎歌集』をめぐって

村田 正博

一、独創の眼

正岡子規が子規ならではの独創の歌や歌をめぐる考えを開拓した、それを開眼と言うならば、実際の詠作におとらず、明治三十一年（一八九八年、子規三十二歳）の「歌よみに與ふる書」、翌三十二年の「曙覧の歌」なども、詠作のための裏づけとして、あるいは歌についての評論そのものとして注目するに足るものであることは、いまさら言うまでもない。ただ、本稿の見るところ、その独創に眼を奪われるあまり、そうした見かたや主張のよってくる来歴については、なお追究の必要も残されているごとくである。本稿では、先行歌人の一人、曙覧の歌の卓越を子規が発見するとともに、新しい歌の、よって立つべきありかたをもそこに見て取った「曙覧の歌」をめぐって、子規の独創の、主としてその来歴の一端をめぐって考察を試みることにする。

二、三つの歌集より、その実際

子規が橘曙覧遺稿『志濃夫廼舎歌集』を和歌革新の先駆として称揚したのは、明治三十二年春のことである（「曙覧の歌」一〇九、『日本』に三月二十二日〜四月二十三日連載）。子規が曙覧を知るにいたった経緯

を、その連載の一において、次のように述べている。

余の初め歌を論ずる、或人余に勧めて俊頼集・文雄集・曙覧集を見よといふ。其斯くいふは三家の集が尋常歌集に異なる所あるを以てなり。先づ源俊頼の散木弃歌集を見て失望す。いくらかの珍しき語を用ゐたる外に何の珍しき事もあらぬなり。次に井上文雄の調鶴集を見て亦失望す。これも物語などにありて普通の歌に用ゐざる語を用ゐたる外に何の珍しき事もあらぬなり。最後に橘曙覧の志濃夫廼舎歌集を見て始めて其尋常の歌集に非ざるを知る。其歌、古今・新古今の陳套に墮ちず、眞淵・景樹の窠臼に陥らず、萬葉を學んで萬葉を脱し、瑣事俗事を捕へ來りて縦横に馳驅する處、却て高雅蒼老、些の俗氣を帶びず。殊に其題目が風月の虚飾を貫ばずして、直に自己の胸臆を攄く者、以て識見高邁、凡俗に超越する所あるを見るに足る。而して世人は俊頼と文雄を知りて、曙覧の名だに之を知らざるなり。

と。すなわち、子規が歌を論ずるに際して、「或人」に勧められて三つの歌集を見た、その三つの歌集のうち、子規の意になつたのが曙覧の『志濃夫廼舎歌集』であつたと言うのである。

ここに「或人」と言われるのが、佐佐木信綱であったことを証す資料がある。後年、このことを回想した佐佐木信綱の文章がそれである。

子規君との交わりは、坂井辨君をとほしてであつた。坂井君は當時神田雄子町にあつた日本新聞の社員であり、予はほど近い小川町に住んでをつたので、しばしば訪問をうけた。ある時坂井君は、子規君が和歌の方面にも力をいたしたいから、歌集をかしてほしいとの傳言をもたらされた。予は座右にあつた加納諸平の柿園詠草と、井上文雄の調鶴集と、源俊頼の散木弃歌集とをかしたやうに思ふ。やがてそれを返されたので、次に井手曙覽の志濃夫廻舎歌集をかした。曙覽は福井の歌人としては、生前藩主春嶽公の訪問をうけたほど有名であつたが、子規子の推賞によつて一層名高くなつたのであつた。

『明治文學の片影』、「子規と曙覽」(昭和三年記)

また、佐佐木信綱『竹柏園藏書志』の志濃夫廻舎歌集(五冊刊)の項においても、

流布の刊本なれど、明治十三年予が幼くて福井にものしつる時、曙覽門なる河津直入氏より贈られしもの。後、正岡子規君に本書を貸し、曙覽の名、世に喧傳せらるゝに至れり。さる縁を以て特に掲ぐ。

という記述を見出すことができる。

ところが、佐佐木信綱に宛てた子規の書簡(明治三十二年五月卅一日)には、それとは異なる事情が記されている。この書簡は、封筒表書きに『書籍三冊添』と記されており、先の信綱の回想にあつた『柿園詠草』・『調鶴集』・『散木弃歌集』を子規が信綱に返した折のものと推定

される(講談社『子規全集』第十九卷、書簡二、和田茂樹編注)。

拜啓 恩借之歌集早く御返可申上之處取紛れ延引仕候 只今御返却申候 難有御禮申上候 曙覽のしのぶのや集ハ他より借り申候 何か外に面白きもの御不用ならバ拜借致度候

右用事迄 大畧 不盡

この書簡によると、子規は、『柿園詠草』など三つの歌集を信綱より借りるとともに、他の誰れかより『志濃夫廻舎歌集』を借覧していたことがわかる。

ただし、この書簡の中で「曙覽のしのぶのや集ハ他より借り申候」と書くのは、『柿園詠草』など三つとともに『志濃夫廻舎歌集』も子規が信綱よりその繙読を薦められたのであつたからにはかなるまい。『志濃夫廻舎歌集』を子規が信綱より借りたのでなかつた、そのわけをつまびらかにすることはできないけれども、ともども薦められるまにまに、子規は手を尽くして『志濃夫廻舎歌集』にもいちはやく目を通していたのである。

ならば、その時期は、いつごろだったのであるうか。子規「曙覽の歌」の連載が明治三十二年三月二十二日より四月二十三日までであることから、まず大まかに、それ以前であることは確かである。それをどこまでさかのぼれるかと按ずるに、同じ書簡中に見える『柿園詠草』の繙読について明治三十一年三月以前のこととして理解されるふしがある。

明治三十一年三月十一日付け『日本』に「松の山人投(投稿)」として掲載された十首の歌について、子規が変名を使って掲載したのではないかという質疑があつたのに対して、三月二十日と二十二日の

『日本』誌上で子規が次のように答えている、曰く――

：三月十一日紙上に番外百中十首（松の山人投）として掲げある歌を吾等が變名にて掲げ候やの御尋ね有之候へども右は盡く柿園詠草中に在る歌にて吾等の歌とは全く異なり居候。柿園詠草中の歌を何人が投じて如何にして紙上に載せられたるかは固より吾等の知る所には無之候。

〔人々に答ふ〕一、『日本』、明治三十一年三月二十日

と。そうして、

朝風に若菜賣る兒の聲すなり朱雀の柳眉いそぐらん

〔柿園詠草〕一、題「都若菜」

暮れぬめり葦咲く野の薄月夜雲雀の聲は中空にして

〔同、一、題「春月」其二〕

など十首をめぐって、子規の庶幾する歌のさまではないことを述べてゆく、その中で、

五百重山霧深からし菅笠のしづくも落つる有明の月

については、「十首中此歌一首は柿園詠草中に無きやうに覚え候。如何の譯にや」との疑義を開陳するのであり〔人々に答ふ〕二、三月二十二日）、このことは、投稿された歌と『柿園詠草』とを仔細に見比べるの検討を子規が行なっているということにほかならない。

けだし、信綱が子規に『柿園詠草』・『調鶴集』・『散木弃歌集』を貸したのは、その三月の記事（「人々に答ふ」一・二）が執筆される直前というより、それよりいささかさかのぼるころと想定するのが自然かと判断される。そうして、その折、『志濃夫廼舍歌集』をも見るように子規に薦めたのではなからうか。子規が三つの歌集を信綱に返した

三十二年五月末まで、おおよそ一年半になんなんとしている、その恐縮が、先の子規の書簡に表明されるとともに、その書簡をしたためた時には、「曙覽の歌」はすでに連載を終えているのであり（三・四月）、お薦めのそれは、お手を煩わすことなく、しかと葉籠中に取めましたという、相応の気づかいを示したものと理解が届く。

このように考えてくると、もう一つ、読めてくることがある。「曙覽の歌」の冒頭に、

余の初め歌を論ずる、或人余に勧めて俊頼集・文雄集・曙覽集を見よといふ。

とあった、その「余の初め歌を論ずる」という一節についてである。子規が、おそらく言う意味において歌を論じた初めは、明治三十一年の「歌よみに與ふる書」〔十たび歌よみに與ふる書〕まで、『日本』に二月十二日（三月四日連載）であったかと考えられる、その時と、信綱に数種の歌集を見よと薦められたと推察される時とが、おおよそ、符合を示すことである。

「歌よみに與ふる書」〔十たび歌よみに與ふる書まで〕には、そうした歌集の多くについて、言及するところが、ない。だが、本格に歌を論じようとするにあたって、子規は、そうした作業を通しての裏打ちを意図していたのであった。

三、「鬼の泣く聲」を通して

子規が曙覽の『志濃夫廼舍歌集』を繙読したのが明治三十一年の二月、もしくはそれ以前であったことを証する歌が、ある。

金槐和歌集を讀む

こゝろみに君の御歌を吟ずれば堪へずや鬼の泣く聲聞ゆ

〔百中十首〕其二〔徒然坊選〕第十首、

『日本』明治二十一年二月二十八日

「こゝろみに」は、さる予感・確信のもとに、そのとおりの結果が得られるかどうかためしみる意。そのようなつもりで鎌倉右大臣源實朝の歌を吟じてみたところ、果たして、こんなことが起こった、すなわち「堪へずや鬼の泣く聲聞ゆ」ということが。「堪へずや鬼の泣く聲聞ゆ」とは、人間の感情を持ち合わせないはずの「鬼」が私の吟じた實朝公の歌を聞いて、こらえきれなくなったとでもいうのか（そんなことはありそうにないことなのに）、「こゝろみ」が実際となつて、「鬼」の感泣する声が聞こえる——というのがこの一首の大意である。ただし、子規は、實朝公の歌に、『古今和歌集』序に言う「やまとうた」（倭歌）の本質・効能の確かな顕現を感得したものと理解される。

やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。

世中にある人事わざしげき物なれば心に思ふ事を、見る物きく物につけていひ出せるなり。花になく驚、水にすむ蛙の聲をきけば、いきとしいけるもの、いづれか歌をよまざりける。力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌也。

（仮名序）

夫和歌者託其根於心地發其花於詞林者也 人之在世不能無爲思慮易遷哀樂相變 感生於志詠形於言 是以逸者其聲樂 怨者其吟悲 可_レ以述_レ懷可_レ以發_レ憤 動_レ天地感_レ鬼神化_レ人倫 和_レ夫婦 莫_レ宜_レ於倭歌

（真名序）

（引用は『日本歌學全書』第一編、『古今和歌集』による）

それとともに、さる歌を吟じてみると鬼の泣き声が聞こえるというのは、たとえば、次のような説話に見える、

氣霽風梳新柳髮_ヲ 氷消波洗舊苔鬚_ヲ

内宴 春暖 都良香

故老傳云、彼此騎馬人、月夜過羅城門誦此句。樓上

有聲曰、阿波禮云々。文之神妙、自感鬼神也。

（大江匡房談・藤原實兼筆録『江談抄』第四）

のごとき、詩歌の威徳にまつわる話柄をもあしらいつつ、實朝公の歌をたたえたものと認められる。

いったい、詩句の卓越を鬼神の感嘆によって称揚しようとする発想を仕組まれた歌は、古今集序が広く知られているのに比して、必ずしも多くはのこされていない。

しき島ややまとの國は あめつちの ひらけ初めしむかしより
岩戸をあけておもしろきかぐらのことばうたひてしさればか
しききためしとてひじりの御世のみちしるく人のこゝろを
たねとしてよろづのわざをことのはに おに神までも あはれと
て八島のほかのよつのみ波もしづかにをさまりて……

（以下略）

（阿仏尼『十六夜日記』、鎌倉滞在の記のうち）

『新編国歌大観』第五卷、四〇九、一一七

陀羅尼品（法華廿八品和歌 延宝九年八月 後水尾院一周御忌）

しき島のみちにかはらじおに神もあはれとき、し法のことのは

（『靈元法皇御集』、『新編国歌大観』第九卷、一一、七七六）

戯れに

吾^〇詞をよるこび涙こぼすらむ 鬼^{〇〇〇}のなく声する夜の窗
燈火のもとに夜な／＼來たれ鬼 我ひめ哥の限りきかせむ
人吳き人に聞する詞ならず 鬼の夜ふけて來はつげもせむ
凡人の耳にはいらじ 天地のこゝろを妙に洩らすわがうた

〔橘曙覧「志濃夫廼舎歌集」第三集 春明卿、

『新編国歌大観』第九卷・三五七・五一七、五二〇〕

など、踏襲の形跡が比較的^に顕著な例である。

こうした例のうち、とりわけ注目されるのは、曙覧『志濃夫廼舎歌集』のそれである。他例が「敷島の道」・「鬼神」・「あはれ」といった語句を用いるのに対して、曙覧の例は、「歌」・「鬼の泣く声」という語句を用いており、語句も、そうして、もとより発想も、子規のそれと揆を一にするものと認めることができよう。

子規の、かの歌が、曙覧の、この歌に語句と発想とを借りて實朝の卓越をほめたのであることは、まず、確かだと思ふ。

『日本』誌上にこの歌が掲載されたのが明治三十一年二月二十八日のこと。この時期、子規は、同じ『日本』誌上に「歌よみに與ふる書」を連載している（同年二月十二日、三月四日）。

仰^{おほせ}の如く近來和歌は一向に振ひ不申候。正直に申し候へば萬葉以來實朝以來一向に振ひ不申候。

と、萬葉集と實朝とを持ち上げて述べ始めるのが初回（二月十二日）。その主張の背後には、ながらく和歌の規範と仰がれてきた古今和歌集を、その規範としての位置づけより解消しようとする意図があり、「再び歌よみに與ふる書」（二月十四日）で、

貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候。

と揚言し、貫之「空に知られぬ雪」（拾遺集六四）・「人はいさ心もしらず」（古今集四二）を批難。「五たび歌よみに與ふる書」（二月二十三日）では、躬恒「心あてに」（古今集二七七）・「闇はあやなし」（同四一）等の歌を酷評している。

ただし、古今集批難の激越にもかかわらず、子規の本意は、古今集そのものの否定であったのではなく、古今集を後世の歌人たちが規範と仰ぎつづけてきたことを論難しようとするのであったと窺える面がある。

それでも強ひて古今集をほめて言はゞつまらぬ歌ながら萬葉以外に一風を成したる處は取餌^{とりえ}にて如何なる者にて始めての者は珍らしく覺え申候。只之を真似るをのみ藝とする後世の奴こそ氣の知れぬ奴には候なれ。それも十年か二十年の事なら兎も角も二百年たつても三百年たつても其糟粕を嘗めて居る不見識には驚き入候。何代集の彼^か代集のと申しても皆古今の糟粕の糟粕の糟粕ばかりに御座候。

〔再び歌よみに與ふる書〕

但貫之は始めて筒様な事を申候者にて古人の糟粕にては無之候。：（中略）：それを本尊にして人の短所を真似る寛政以後の詩人は善き笑ひ者に御座候。

〔同書〕

こうした意図のもとに、以下、「三たび歌よみに與ふる書」（二月十八日）では、眞淵と實朝とを対比して、實朝の調子の強さを言い、さらには、「八たび歌よみに與ふる書」（三月一日）と「九たび歌よみに與ふる書」（三月三日）とにおいて、

悪き歌の例を擧げれば善き歌の例をこゝに擧げ可申候。：先づ金槐和歌集などより始め申さんか。

と前置きして、

武士の矢並つくるふ小手の上に霞たばしる那須の篠原

〔金槐和歌集〕三四八

時によりすぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめたまへ

(同七一九)

物いはぬよものけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を思

ふ

(同七一八)

など、實朝の歌に高い評価をささげている。その、「必要なる材料（題材や用語）を以て充實したる」ところ、「只真心（真率の心情）より詠み出でたらん」ところ、そうして萬葉に擬しながら萬葉を超えるところなどにおいて。

（實朝を通しての子規開眼の様相については、機会を改めて論ずる。）

先にふれた子規『金槐和歌集』を讀むの歌は、こうした「歌よみに與ふる書」の連載とほぼ時を同じくして詠まれたものであった。このように見てくると、「堪へずや鬼の泣く聲聞ゆ」とは、古今集以後の、子規の難する「槽糠」ばかりの時代にありながら、實朝公の歌は、「目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」その感涙を誘う、古今集序の標榜する歌のはたらきを備える稀有なるものだとする、子規による位置づけが詠み込まれているのである。

「歌よみに與ふる書」の連載に、曙覽への言及は、見られない。だが、その連載に当たった子規の思索の圏内に『志濃夫廼舎歌集』があったことを証して立つのが、實朝公の歌に「鬼の泣く聲」を聞く、くだんの一首なのであった。^{（注）}

四、子規歌論形成の一側面

曙覽について子規が言及するのは、「歌よみに與ふる書」連載の翌年、明治三十二年における「曙覽の歌」である（『日本』三月二十二日（四月二十三日）。本稿が初めにふれた、三つの歌集についての回想より説き起こし、「鬼の泣く聲」を詠む「戯れに」四首をめぐって、その人に知られることの稀れであった生涯の不平・萬斛の涕涙を汲み、福井藩主松平春嶽が曙覽を陋屋にたずねて教えを乞うたという、『志濃夫廼舎歌集』附載の「橘曙覽の家にいたる詞」をしめす連載第一より始めて、

たのしみはあき米櫃に米いでき今一月はよしといふ時

たのしみはまれに魚煮て兒等皆がうましといひて食ふ時

など（『獨樂吟』のごとく、貧苦についても、その中の楽しみについて

ても「感情を有の儘に寫した」ところ、

たのしみはつねに好める焼豆腐うまく烹たてて食せけるととき

たのしみは小豆の飯の冷たるを茶漬てふ物になしてくふ時

など（『獨樂吟』のごとく、「自己周囲の活人事活風景」を「歌の材料」として「残さず餘さず」歌に詠んだところに、子規快心の新しい和歌としての卓絶を見出そうとしたものであった。三つの歌集についての回想において『志濃夫廼舎歌集』にふれて、

萬葉を學んで萬葉を脱し、瑣事俗事を捕へ來りて縦横に馳驅する處、却て高雅蒼老、些の俗氣を帯びず。殊に其題目が風月の虚飾を貫ばずして、直に自己の胸臆を擡く者、以て識見高邁、凡俗に超越する所あるを見るに足る。

とあったのは、實にそういうことであつた。

また、いわゆる萬葉調和歌の制作をもつて知られる縣居門の楯取魚彦と比べて曰く、

彼魚彦が徒に萬葉の語句を摸して萬葉の精神を失へるに比すれば、曙覽が語句を摸せずして却て萬葉の精神を傳へたる伎倆は同日に語る可きにあらず。さはれ曙覽は徹頭徹尾萬葉を摸せんと務めたるに非ず、寧ろ其思ふまゝを詠みたるが自ら萬葉に近づきたるなり。
(其五)

と。また曰く、

世に萬葉を摸せんとする者あり、萬葉に用ひし語の外は新らしき語を用ゐず、萬葉にありふれたる趣の外は新らしき趣を求めず、此の如くにして作り得たる陳腐なる歌を擧げ自ら萬葉調なりといふ、こは萬葉の形を摸して萬葉の精神を失へる者なり。萬葉の作者が歌を作るは用語に制限あるにあらず、趣向に定規あるにあらず、あらゆる語を用ゐて趣向を詠みたる者即ち萬葉なり。曙覽が新言語を用ゐる新趣味を詠じ毫も古格舊例に拘泥せざりしはなか／＼に萬葉の精神を得たる者にして、古今集以下の自ら畫して小區域に局限たりしと同日に語る可きにあらず。只歌全體の調子に於いて曙覽は終に萬葉に及ばず實朝に劣りたり。惜む可きは彼は完全なる歌人たる能はざりき。
(其八)

と。萬葉、實朝、そしてそれらと曙覽とを秤量しながら、子規が思索を展開しているのを見て取ることが出来る。

實朝が萬葉に擬しながら萬葉を超えるところがあつたと子規が見ていること、前節においてふれたとおりである。それに比べて、曙覽は、

萬葉など古格舊例に拘泥せずして、かえつて萬葉の精神を得たというのが、ここで子規の説くところである。萬葉をめぐる實朝や曙覽の歌のありようを見定めようとするところ――、それがその範圍の問題にとどまるのではなく、子規自身の、「生が好む所の萬葉調」(「歌よみに與ふる書」)をもつて和歌革新を果たそうとする思索を深めることでもあつたというのが、古典和歌や先行歌人を論ずることの、子規における第一義であつたのである。

このように考えるとき、『志濃夫廼舎歌集』には、次のごとき近藤芳樹(一八〇一―一八〇年)の「はし書」(序文)が加えられていることに、改めて注意を引かれる。

春のころ、蜂のみち(蜜)をつくるさまを見るに、おのがじ、こゝかしこにあかれちりて、あるは櫻、あるは桃、さてはつゝじ・山振(やまび)、何にまれ、花といふはなのかぎりを、いさゝかづゝついはみもち歸りて、軒にかけたる巢のうちに積みかさねつゝ、そのくさゞを、ひとしなに醸しなせり。こを嘗め試みて、櫻もてかもせるはこれ、桃もて醸せるはこれ、つゝじ・山吹もてかもせるはこれ、とやうに、舌のうへに、味の辯(わかま)へられむは、いまだなりをへぬなま／＼のみちにて、さらにうまし物といふべくもあらぬものなるをや。歌よむもこれにおなじ。おのがじ、好めるかたを學びて、あるは萬葉、あるは古今、さては千載・新古今、いづれにまれ、詞といふ言葉のかぎりを、いさゝかづゝ取つどへて、ひとうたにつくりなす。こを唱へ試みて、これは萬葉もてつゞれる、これは古今もてつゞれる、千載・新古今もて綴れる、とやうに、心のうちに、姿のわかまへられむは、いまだなりをへぬなま／＼

の歌にて、さらにうまし言の葉といふべくもあらぬものなるをや。されば、花をついばみて醸しなすがみちにて、これやがて蜂のおのが物なり。舊きを學びてあたらしくなすが歌にて、これすなはちよみぬしのおのが物なり。そのおのがものとするわざに勤めず、萬葉・古今に似せ、千載・新古今に、せて、われ歌のさまでたりと誇るとも、誰かまことの萬葉・古今・千載・新古今をおきて、似せもの、萬葉・古今、千載・新古今を翫ばんやは。こしのみちの口(越前) 福井のさとに、橘曙覧といふ翁あり。わかき時より歌を好み、世のかぎり(終生)、こをわざとして終られけり。そのかいつみ(書體) おかれし集を、家にも遺し、世にもつたへむ、と子今滋ぬし、人々とかたらひはかり、かく板に鏤められけるに、おなじくは、芳樹がはし書をそへて、と佐藤誠ぬし、て、こひおこせられしかば、此集を開きみるに、あがたみ(賀茂眞淵)の水をくめるにもあらず、鈴の屋(本居宣長)の響きにしがへるにもあらず、ひとふしある口つきの、いとめづらしくおもひしまゝに、誠ぬしに、ひとゝなりをとひ聞くに、世のかぎりやまと魂たちろがで、

おほやけを尊び、古へをしたふ志厚く、さいつとし、天の下のままつり事、あらたまらむ(維新)とせしころは、あつしき病ひに煩ひて、今はのきはと見えたりしかど、誠ぬしが都よりのかへさ(歸時)に、立よれるを引とゞめ、衾手づからかいのけて、ありさまどもたづねきき、今日こそ身のいたづきをも忘れたりけれ、とよろこばれしとぞ。さるひとつ心を種として、よみ出られし言の葉どもなれば、彼似せ物のかきつ(垣内、範圍)をえ離れあへぬ、

かいなでの歌つくりとはこよなくて、蜜のおもむきを、よく味ひしられし翁なるべく、これなんおのがかねていへるころばへにはかなへる、とおもへるまゝに、あぢきなきそゞる言ながら、巻のはじめに記しぬ。さるはかかるすぢ、はやくからうたにつきて、もろこし人のいひふるしたることなれど、おなじことまたいはでもしあらめやとて。

明治十とせといふとしの六月ついたちの日
東京四谷の寄居子庵にて

近藤芳樹識

蜂が蜜を熟成させるありさまになぞらえて、古典和歌を学んでおのが和歌を作りなす、そのことにおいて、たじろがぬやまと魂という「ひとつ心」を種として言の葉に詠出されたところに曙覧なりの和歌の創造があるとする(傍線を加えた部分参照)、この芳樹の序文の内容が、萬葉という古典和歌との関わりにおいて實朝や曙覧の和歌の到達を秤量し、ひいてはみづからの歌のあるべきようを見定めようとする、見てきたとおりの子規の思索とその根柢において重なり通ずるものがあることを見逃すことはできない。

近藤芳樹は、いわゆる舊派の歌人の一人(序文執筆当時は宮内省文学御用掛)であるとともに、歌集(編著『類題和歌月波集』)の部立てに新曆を採用するなど、新しい試みにも関心を示した人としても知られている。その立場と度量を斟酌するに、曙覧という、近世異色の歌人の歌集のための序文を委嘱されることになるのも、まことに人を得た選択であったと言えようし、その歌集に心を引かれた子規の関心を思うさま展開させるためにも、この序文は、相応の作用を持ち得た

ものと推察される。

さらに一つの可能性を思わないでもない。序文末尾に、曙覧の歌のありようが「おのがかねていへるこゝろばへにはかなへる」と判断して序文として記したと言う、その言葉をそのままにとるならば、『志濃夫廼舎歌集』の序文とする以前より、この内容の言明があったということがある。あるいは、芳樹の十年忌に板行された『寄居文集』初編下（明治二十三年三月三日出版）に「うたよみにさとす詞」と題して、曙覧に関する部分のない、ほぼ同内容の記述が収められているのが、その原型でもあろうか。

「うたよみにさとす詞」という、そちらの題名にも興味をそそられるけれども、それを子規が見たとも、いまのところ、即断しにくい。さしあたっては、舊派に属するこの人にして子規の和歌革新のさきぶれをなす記述を、『志濃夫廼舎歌集』の序文というかたちでのこしていることに留意するにとどめておきたい。

注

1 子規に『志濃夫廼舎歌集』を貸したむねの記録が信綱にあるのは、その繙読を薦めたという記憶によるものか、あるいは、改めて信綱より子規がそれを借覧したというような事情があるのであろうか、つまびらかにすることができない。だが、大切なことは、子規が「初め和歌を論ずる」にあたって、『志濃夫廼舎歌集』を見るように信綱より薦められた、そのことである。その書物自体を信綱より借りたか、他より借りたかは、実は、いずれであっても、かまわない。

2

子規による歌集抄写がのこされており（いわゆる『和歌手抄』、改造社『子規全集』第二十二巻・講談社『子規全集』第二十巻）、俊頼『散木奔歌集』・元政『草山和歌集』・田安宗武卿集（天降言）・中島廣足『瓊浦集』・泉圓『ひな/さへづり』・諸平『柿園詠草』・井上文雄『適英和歌集』・原久胤『五十楓搔葉集』・井上文雄『調鶴集』、そうして曙覧『志濃夫廼舎歌集』の十種の歌集を繙読したあとをとどめている。これらの十種の家集のうち、『柿園詠草』のほかに子規の抄写時期を推定できるのは、『田安宗武卿集（天降言）』であり、明治三十二年九月から十二月の間に子規が信綱より借覧した形跡がある。「田安宗武卿の天降言の原書又は其外同卿之作歌を載せたる書籍」の借覧を依頼する、信綱宛て子規書簡（明治三十二年八月廿五日付け）、「宗武卿の天降言」借覧を再度依頼する、信綱宛て子規書簡（先度の依頼の折に信綱が旅行中であつたため。同年九月十三日付け）、および「拜借の天降言遅延致候 只今御返却に及び候」むね、信綱宛て子規書簡（同年十二月廿二日付け）がそれである（佐佐木『明治文學の片影』、「子規と天降言」）。子規による和歌手抄の作業は、『柿園詠草』抄出の明治三十一年早々のころより、『田安宗武卿集（天降言）』を借覧した翌明治三十二年九月より十二月のころまで、おおよそ、そんなあたりであつたものと推察される。

3

講談社『子規全集』第二十巻（橘曙覧遺稿志濃夫廼舎歌集手抄解題）では「その抄写の時期は不明であるが、ほぼ、明治三十一年の後半から、『曙覧の歌』の発表の時期（明治32・3・22）までの間と推定される」として、「曙覧の歌」執筆の時期に寄せて

の見解が見えるが、改造社『子規全集』第二十二卷（編者補遺）では「和歌手抄」は明治三十一年、居士が「歌よみに與ふる書」を提げて歌壇に臨んだ數年前からの努力である。一世を驚かした居士の歌論の裏に、かういふ人知れぬ努力があつたことは注意すべきである」と述べるのに、本稿は、共鳴をおぼえる。

曙覽「戯れに」を踏まえる作が、このほかにも、伝えられている。明治三十三年、子規「七月一日例會」（十首）中の第六首、

ヨキ歌ノ世ニシ出テネバ小夜更ケテ鬼ス、リ泣ク声モ聞エズ
 （『竹乃里歌』）

これは、曙覽「吾調をよるこび涙こぼすらむ鬼のなく声する夜の窗」を裏返して否定のかたちにしたもの。ソナナコトデハヨクナイカラ、諸君、精出シテヨキ歌ヲ才詠ミナサイと薦めたもの。また、この年、八月六日締切で兼題「鬼十首」を募集（「報東々幾數の巻抄」、『日本』七月八日）、

天地のもの皆いねしま夜中に鬼あらはれてわが歌を乞ふ

左千夫

病みこやす君が歌よむ枕べに首うなだれて鬼泣くらんか

秋水

など、「鬼の巻抄」が編まれており、『日本』附録週報、十月二十九日。なお、左千夫ら九人が出詠した記録が講談社『子規全集』別巻三に収められている）、子規周辺において曙覽「鬼の泣く声」の歌がいかに珍重されていたかを窺うことができる。

先にふれた、いわゆる「和歌手抄」の中に「橘曙覽遺稿志濃夫廻舎歌集手抄」がのこされている。そこには、芳樹の序文が抄写さ

れていない。だが、それは、この序文が「明治十年六月」という曙覽没後（十年）の板行に当たって加えられたものであり、曙覽その人に属するのではないといった事情などから抄写の対象とされなかったものと想察される。

「うたよみにさとす詞」は、次のとおりである。『志濃夫廻舎歌集』序文と相違する部分には、傍線を施して、それと示すことにする。

おのれひと、せ山里にものでして、蜂のみちをつくるさまをみしに、おのがじ、こ、かしこにあかれちりて、あるは櫻、あるは桃、さてはつゝじ・山吹、何にまれ、花といふはなの限りを、いさゝかづゝついはみもちかへりて、軒にかけたる巢のうちにすみかさねつゝ、そのくさゞを、ひと色にかもしなせり。こをなめこゝろみて、もしさくらもてかもせるはこれ、桃もてかもせるはこれ、つゝじ・山吹もてかもせるはこれとやうに、舌のうへに、味ひのわかれなんは、いまだなりをへぬまゝの蜜にて、さらにうましものといふべくもあらぬものなるをや。

歌よむもまたくこれにおなじ。おのがじ、好めるかたを学びて、あるは萬葉、あるは古今、さては千載・新古今、いづれにまれ、言葉といふ詞のかぎりを、いさゝかづゝとりつどへて、ひとつたにつくりなす。こをとなへこゝろみて、これは萬葉もてつくれる、これは古今もてつくれるとやうに、心のうちにすがたのわかまへられんは、いまだなりをへぬまゝの歌にて、さらにうまし言の葉といふべくもあらぬものなるをや。されば花をついばみてかもしなす蜜にて、これすなはち蜂のおのがもの

也。舊きを學びてあたらしくなすがうたにて、これ則ちよみぬしのおのがもの也。そのおのがものとするわざにつとめず、萬葉・古今に似せ、千載・新古今に似せて、われ歌のさまを得たりとほこるは、もろこし人のいはゆる優孟衣冠、たれか誠の萬葉・古今・千載・新古今をおきて、にせもの、萬葉・古今・千載・新古今をもてあそばんや。これらのことはやくもろこし人のいひふるしたるあけつらひながら、おなじことまたいはじにもあらじと、つれづれ草にかけるにならひてなん。とにもかくにも心のまことをよそにして、しらべをのみいふらんはうけがたきをしへなりかし。

冒頭、「おのれひと、せ山里にもものして、蜂のみちをつくるさまをみしに」とあるのが、さる体験を語る、より直截の表現と読めるといふのが、こちらが先行するかと判断する、さらなる根拠の一つである。また、後段、「優孟衣冠」の故事（『新編古今事文類聚』前集卷二十四、人道部、父執「往見優孟」、同書後集卷十八、肖像部、形貌「優孟似叔敖」など）や『つれづれ草』の文言（第十九段）を踏まえるのも、それと明示するのは、いささかペダンティックに過ぎる印象があり、『志濃夫廼舍歌集』序における、さりげなき言及こそ似つかわしく感ぜられるのも、そう判断するふしの一つである。